



「可能性」



イギリスの哲学者バートランド・ラッセルは「もっとも強い希望は、絶望から生まれる」と言っています。希望と絶望との間には、言うに言われぬ不可思議な関係性があり、絶望して初めて、希望の持つ力、その意味に気づくということでしょうか。一度絶望したことがある体験から、思いがけない希望に満ちた世界が展開されていくのではないのでしょうか。

また、ほんのわずかな希望に人生をかけることで、人生が大きく変わっていくきっかけになるかもしれません。可能性は100パーセントでなくてもよく、数パーセントあれば、十分成就する値であるということでしょうか。たとえ、今は、実現不可能な現実の中に身を置いていても、ほんのわずかな将来への明るい兆し^{きざ}があるならば、決してあきらめない方がいいと言えるわけです。

ここに、こんな詩があります。

絶望のとなりに

だれかが

そっと腰かけた

絶望は

となりの人に聞いた

「あなたはいったい誰ですか」

となりの人はほほえんだ

「わたしの名前は

希望です」

(やなせたかし『絶望のとなり』)

たとえ、人生の中で絶望に打ちひしがれていても、希望は必ず、その隣にいて、その人にほほえみかけ、励ましてくれると詩人(実は漫画『アンパンマン』の作者でもあるのですが)は言うのです。何かがあって、自分や自分を取り巻く世界に絶望しても、ほんのわずかな可能性があるならば、将来に向けて頑張っていけるのではないのでしょうか。人は挫折して初めて、自分の中にある可能性に気づくのではないかと思います。自分自身の可能性に賭けて、二度とない人生をやり直してみるのもいいことだと思います。深まる秋の中で、自分の生き方を少し考えてみるのもいいのではないのでしょうか。